

平成29年 9 月 1 日（金曜日）

総務、産業、建設常任委員会会議録

平成29年 美里町議会総務、産業、建設常任委員会会議録

平成29年9月1日（金曜日）

出席委員（7名）

委員長 我妻 薫 君

副委員長 山岸 三男 君

委員 千葉 一男 君

櫻井 功紀 君

前原 吉宏 君

藤田 洋一 君

鈴木 宏通 君

欠席委員（なし）

議長 吉田 眞悦 君

議会事務局職員出席者

主 事 高橋 秀彰 君

平成29年9月1日（金曜日） 午前9時30分 開会

第1 農商工連携による活性化について（政策提言に向けて）

本日の会議に付した事件

第1 農商工連携による活性化について（政策提言に向けて）

午前 9 時 3 0 分 開会

○委員長（我妻 薫君） それでは、おはようございます。

大分間近になってからのお集りいただくお願いでしたので、緊急で申しわけございませんでした。

政策提言の日程が押し迫っていますので、緊急、急な声かけでございましたが、きょう、総務、産業、建設常任委員会を開催させていただきました。

今、お話ししましたけれども、9月会議を挟んで政策提言をいよいよまとめる時期に来ているんだろうなというふうに思いますので、そのきょうはまとめのまず最初に大きな土台になる意見交換ができればいいのかなと思いますので、きょう御協力のほどお願い申し上げます。

日程第1 農商工連携による活性化について（政策提言に向けて）

○委員長（我妻 薫君） それでは、全員出席しておりますので、委員会は成立しております。

ただいまから今、挨拶でも述べましたが、去年から農商工連携を土台に政策提言の研究を重ねてきましたが、任期の切れることも含めていよいよ最終的な政策提言をまとめなければならないだろうと思いますので、よろしくお願いしますが、さっき事務局からお手元に配付していただきましたのは、3月24日に産業振興課と意見交換を行いました。ここで町の現在の考え方、やっていることとかあるいはこれからやろうという考え方等々の意見交換がされたというふうに思いますので、それらを踏まえて提言に結びつける必要があるだろうということで、ちょっと長いんですが、資料配付してもらいました。それを土台にしながらも、この間北海道を視察したり、つい最近では足利市を視察し、そしてあと、町内的にも各生産団体とかそういう団体との意見交換、そしてあるいはJAとの意見交換、そうした意見交換をずっと重ねていっていますので、視察や意見交換、そういったものを含めて農商工連携を主題にしますけれども、町の産業活性化に向けて当委員会としてどのように町に対して提言をしていくか、そういうところをきょうはざっくばらんにですね、まず今言いましたように去年の活動も含めて意見をまず出していただいて、きょうはたたき台というか、素案をできればまとめさせていただければいいのかなと、そういうふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

資料は今、産業振興課と意見交換のだけですが、その過程から言えば去年の北海道のね、壮瞥とかそういったところの報告、あるいはJAとの報告、あるいは各町内の団体との報告、一応まとめてはありますので、その辺、お持ちかと思いますが、どうしますか。もし、全く持っていなければ一応全部というか手元に置いてやったほうがいいのか。なくても大丈夫だという

のであればこのまま進めたいと思いますが。

- 副委員長（山岸三男君） 資料あったほうがいい。
- 委員長（我妻 薫君） あったほうがいいですか。
- 委員（千葉一男君） せっかく来ているからね。
- 委員長（我妻 薫君） じゃあ、暫時休憩して。予定ですが、今言ったようなところのポイントで、それを土台にしてまとめるという進め方でいいですかね。
- 委員（前原吉宏君） 流れだね。
- 委員長（我妻 薫君） 流れね。じゃあ、去年の北海道の報告から、あとは生産団体とのあれもね、一応まとめて出しています。一番最近の……プリントしたけれども。

休憩しましょう。

午前9時35分 休憩

午前9時44分 再開

- 委員長（我妻 薫君） それでは、再開します。

今、去年の中間報告と、その後のＪＡみどりのとの意見交換の報告。お手元にお届けしました。それと、さっきも言いました最近の足利のですね。視察、踏まえながら町に提言する内容について意見交換をしていきたいと思います。

はっきり言えば、北海道も足利もそれぞれ地元にある農産物を生かした産業というか、農商工連携といったその形態はいろいろありますけれども、その連携のあり方、さまざまなのというように思いますし、それに対する行政の関わり方。共通しているのは北海道も足利も、その割に行政の関わりは強くないと。はっきり言って壮瞥は……、壮瞥は後でね関わりはある、足利は後の関わりはそんなに強くないかなというように思いますけど。あと、足利を見てもそうでしたが、足利の連携ありますね、関係図ね、あの取り組みの中に、麦を使った、いろんな麦わらぼうしの会でやっていた取り組み、それがつながっているんですよね。工業の部分というか、そっちの部分。……本町に生かしていくか。断片的にみんな出していただいて、それを集約しながらまとめていくという線で。感想的なものでもいいですからね、出していただければと思います。

- 副委員長（山岸三男君） 今、この私たちの委員会ではね、ことしの1月、そして今度の7月と北海道あるいは足利、両方行って視察研修した結果としてですね、私が感じたことは、大変取り組みとしてはすばらしい、頑張っていてやっておられるのは私は理解したし、いいなと思って、

感想的には思ってきました。ただそれをですね、美里町に当てはめたときに、北海道の壮瞥町であったりこういう町の取り組みを、あるいは足利市の取り組みをですね、美里町にどのように当てはめるか、あるいは当てはめられるか、その辺、私たちは議論していかないと、この今回まとめということでもなかなか簡単にはまとめ切れないところがあるのかなと今思っていますので。美里町で最初の、1月の議会の報告書を出した部分、1月の議会じゃくてこれは農協とのほうですね。農家の方々、それらを3つ今回……。地元美里町の農業団体の方々と、あと北海道、足利。進んできた中で、まずはとにかくまとめをするためには美里町に当てはめられることと、ちょっとなかなか当てはまらないんじゃないかということと、それを一回みんなで意見を出し合って、少しずつ集約していったらまとめを持っていったらどうかなと私は思うんですけれども、いかがなものですかね、皆さん。

- 委員長（我妻 薫君） 私もそれを求めていたので。
- 委員（前原吉宏君） はい、じゃあ私。
- 委員長（我妻 薫君） はい。
- 委員（前原吉宏君） そのとおりだと思うんです。2年にわたって行って見てきて思ったのは、やっぱりマッチングの努力だと思うんですね。だから美里町の中で持っている生産している強みを上げてですね、それとそれを加工している強みというのを探して流通ルートに乗せるための何か。それぞれやっぱりマッチングをうまく考えていけば一つの形になる。ただ、それに関してはそれなりに投資も必要ですし、またコーディネーターという形でしていますけれども、そういう部分をどういうふうに形つくっていくのか。その辺に関してはまだちょっとクエスチョンの部分も私的にはあります。
- 委員長（我妻 薫君） その連携のね。まず、今言われた生産……。町の中にある現状も強みも確認する。それを踏まえながら、連携のあり方、マッチングというかね。その辺、何か足利の産学官連携のやつなんか、一つの、こんなに大がかりにならなくても一定のね、考え方の基礎になるのかな。
- 委員（前原吉宏君） 例えば、小売サイドから見ると、美里町というのは南郷で言う花野果市場、あとはもう本当に企業でやっています……。ビッグハウスですか、ウジエ、ヨークさんがあってAコープさん。要は5つのそういう店舗がある、なかなか人口2万の町には、そういう市場がある。だから小売をやろうという人もなかなか育たないのかなと思うんですね。流通自体はそういう部分ですごく消費者からは歓迎されている部分あると思うんですよ。それに乗せるためには、どうしたらいいのかというのはクエスチョンになるんですけれども私には。花野

果はある意味生産者とのパイプができていのかと思うんですね。我々の思う。ウジエ自体もそういうのあるんでしょう。

- 委員長（我妻 薫君） ある程度のつながりはあるのね。ヨークにしる、ウジエもそれなりに。
- 委員（藤田洋一君） ウジエはコーナーを設けてあるのね。
- 副委員長（山岸三男君） あります、あります。あそこに全部あります。ビッグハウスにもあるし、ヨークにも、ウジエにも。
- 委員長（我妻 薫君） 部分的な地元生産者とのつながりは、それぞれ。
- 副委員長（山岸三男君） 商品としては置いてあるのね。ただ、それがかなり小さいんだ、規模が。ウジエは新しくできたので少しね、ビッグハウスとか他から比べると少しスペースはあるんだよね。地元産のを置いているスペースが。ウジエだけ大きい。ビッグハウスはものすごく、本当にこれだけしかない。売れ行きもあまりよろしくない。
- 委員（鈴木宏通君） 私から、いいですか。

私の農商工連携という、今回の大きなテーマでしたけれども、実際美里町にはやはりもちろん農商工のいろんな仕事をやっている地元根差した方々がいらっやって、それぞれに努力をなさって仕事をなさっているわけです。その中で、例えば1次産業の農家の方々や商工業者の方々のつながりがまず少し少ないかなということを思いますし、例えばそういう商品開発に限っては町、もしくは例えば例に言えばみどりののポテト部会というのが大手企業との商品開発をしている部分もあります。そういうところをまずいろいろな活性化に向けていろいろしているわけですが、ならば地元のそういういろんな会社、商業者の方、加工する工業関係の方々との地元の中でのいろんな連携をとって新たな商品開発、例えば梨などもいろいろなものをつくっておりますが、なかなかその生産ベースなり商品化というのはなかなか至らないんですけれども、やはりこういうのって、例えばきょうあすにできるものでもなかなかないですし、もちろん提言という中でもいろいろな形で今までも町としてもしてきているわけですし、だからその中でどうこれをつなげて育てていくというところの、例えば足利の笠原産業さんのような社長さんのような考えを持って、農家の方々やまた次に使う商店とかいろいろなケーキ屋さんなり、いろいろそこら辺を使う、このコーディネートをしている部分、そしてもちろんあと北海道の八雲ですか、そちらでも、みそのほうも、例えば地元産のみそをつくるのにどうということをしたらいいかということをおかみさんとかね、やっていたわけですし、やはり2つ見てきた例から言えば、その2次加工なりその加工をする方々が中心になってやってあられたわけですが、美里町にもいろんなそういう酒屋さんから加工する豆腐屋さんから、

いろんな……もありますし、ぜひその方々も含めてね、今主に1次産業の方々が主に加工1、2、3とする6次化というのをやっている方も少なくないですけども、2次加工する方々が私たちもいろいろそういう話題提供なり、そういうことも必要ではないかなというふうなうんと考えてですね、それで実際これが1つつくったから売れるか、次つくったから売れるかというところではないので、それをどう継続してやっていけるか。商品開発に持っていけるかというのを継続的にすることが一番農工商連携の鍵ではないかなと私なりには考える次第です。

- 委員長（我妻 薫君） 鈴木さんから言われたように、ずっと町も6次加工をベースにね、1次産業の農家の人たちに加工と販売というようなつながりをそこに求めてきたんだらうと。2次加工を中心にする人たちの意見がどう反映されてきたか。やってきている、シードルやそういうのも含めて。ただ、その足利みたいだね、今麦わら帽子ではないですけど。（「そういう会ですね」の声あり）まあ、そうだね。壮瞥も確かに2次加工の人たちが中心になって、1次と間を取り持つ。笠原産業そうだね、2次加工の人たちが1次と2次、3次というか、3次産業とそれには消費者までつながるといふ。
- 委員（鈴木宏通君） 他市と言ったらいいかな、他市の試みで南にある酒屋さんでは、かつて自分のところの松山と言ったらいいかな、自分のところで……をつくるのに農家の方々と連携してまず、ふゆみずたんぼとかそういうのをしましたし、あとそれをつくった商品もまた地元大崎や仙台、あと関東近辺に地元でつくった米のこういう商品だという部分のアピールなどをしているところもありますし、もちろんうちのほうではなかなかそういうところが少ないんですけども、だからそういう。かつて齋林さん……。
- 委員（前原吉宏君） 齋林さんはない。
- 委員（鈴木宏通君） 齋林さんね、地元で下小牛田でしていましたね。
- 副委員長（山岸三男君） 齋林本店ね。
- 委員（鈴木宏通君） 11回しましたよね。
- 副委員長（山岸三男君） 何回もやっている。
- 委員（鈴木宏通君） 今もしてます。
- 副委員長（山岸三男君） 今はどうかな。今はやめたかな。何年間続いて。
- 委員（鈴木宏通君） そういうことも試みはありましたよね。ただ、やはり継続とか結果がなかなかということもあるでしょうし、ぜひそういうことは心がけはいっぱいあるんでしょう。
- 委員長（我妻 薫君） 部分的にそういったね、やっているところがあっても、どうつながるか、継続的なものにするか。さっき出たように、前原さんのように、コーディネートね、そこを担

う。

- 委員（前原吉宏君） だから、済みません。鈴木さんが言うとおり、そのとおりだと思うんです。だから、私的には今出たポテトというキーワード、あとみそですか、あと酒は酒屋さん。私的には一番感じるのは鎌田さんあたりには私自身はもうファンですし、地元で食べている人もいると思うんですね。そういう部分をやっぱりこうもっとスポットライトを当てると言ったらなんですけども、そうすることによってみんなでこう、どうなのかな。自分のところでそういうルートができ上がってるんじゃないのかなと思うんですけどもね。（「鎌田さんは海外」の声あり）海外ね。今さらと言ったらいいのか。我々のやるものが新しくつくるものというか。話は2年前、一番最初に戻るんですけども、南郷の小島のみそやさん。

- 委員（鈴木宏通君） 安部さん。

- 委員（前原吉宏君） そんなのもよい例じゃないですか。もうやっていますよ。

- 副委員長（山岸三男君） 俺思うのはね、個人レベルでやると限界、どうしても壁だろうか限界にぶつかる。俺ら視察に行ったのは南郷の安部さんてね、町内で一番大規模の稲作農家。奥さんも独自で米こうじだとか、ドレッシングだとかって、何種類かの商品開発。個人でやっているんですよね。個人のレベルだと、地元産でその商品を置けるかということ、売れないし、知名度がないから、結局仙台とかそういう都市の人口のあるデパートに置かせてもらって、小規模に販売している。生産がどんどんふえていけばいいけれども、限界がある。そうすると、それを町としてどういうふうにバックアップできるかということ我々の常任委員会で提言できることは、まず地元でつくった生産物、それを2次加工する、例えばみそしょうゆで言ったら鎌田醤油屋さん、地元で本当に何百年って歴史を持っている工場というか会社があります。地元でつくった生産物をその会社さんに依頼して商品化してもらって美里産というネーミングをつけて販売に持っていく。大きいこと考えなくていいから、地元でとったやつを地元の会社で加工して、1次、2次、3次って、そういうふうに結びつけてのことを我々とか産業振興課のところでそれをバックアップしていく。前原さんの言ったコーディネーターでそういうのをマッチングするような人がいれば最高にいいんだけども、果たしてそれもできるかどうかかわからないけれども。それを町の力という産業振興課。産業振興課でそういう知識とかノウハウ持てね、そういうふうに取り組みを本気になってやってもらえば、あるいは当然予算つけなきゃなくなってしまうんで、でもまずは地域の産業活性化っていうのであれば、やっぱり予算つけてね、そこまで一生懸命やることはそれはまさしくね、商工連携にもなるし、産学官。（「違うんだよね」の声あり）

- 委員長（我妻 薫君） それでは町で今やっているのをね、この１枚のやつで町のほうからの意見交換でね、やっていくと、どうなの。町でやっているけれども、募集型。ね。補助するよとか、あれは。（「そういうんじゃないんだよなあ」の声あり）
- 委員（鈴木宏通君） いいですか。やはり、やっぱりそういう行政主体といたら変ですけども、そういう形ではなくて、やはり人的なそういう中心になる方々が多数おられる中の後からの後ろ盾なり、そういう部分が行政でする部分であって、やはり壮瞥でしたか、プレーヤーについては個人ですよ。個人というか、個々の部分です。そういうことに尽きるのではないかなと私は思っていますし、どうしても行政主体でこうします、商品開発しますといってもなかなかそこでは多少無理もあるでしょうし、なかなか継続性も得られなかったりする部分もありますし、できればその各個の後押しをしていくなり、そういういろんな手助け、その橋渡しをするのが行政の仕事になっていくのではないかなと考えますけれども、はい。
- 副委員長（山岸三男君） 何か言いたいのはちょっと誤解されているんだけど。ここにも町、そのほかの商工関連事業ということで、町にこれあるんだけど、運営費の補助だとか、業務委託の事業展開とかね、総合案内所の情報発信事業、販売促進事業、これは町でそれなりにこういうことを事業として持っているわけです。私が言いたいのはね、美里町の産業……さまざまだけど、ブランド化するためには個人では無理ですよ。最初から、商工会、商工会というけれども、商工会も会員事業所一人一人の規模はもう少し小さいんですよ。製造業だとか、企業といわれる例えば自動車部品の何か部品つくっている会社は結構美里町にもあるんだけど、製造業とまた全く同じ生産業も製造業も違うんですよ。そこで私が言いたいのは、個人の農家の人が生産したものを端的に言えば農業、農家の、ＪＡが買い上げるとか、何かそういうような、そっちのほう頼り切っているんじゃないですか、ほとんど。全部農業に関しては国の補助事業で豆とかどうのこうのってやっていますからね。そうすると、個人は全部それに頼り切るしかない状況になっている。だったら、私たち今常任委員会の委員としてどういうふうにして連携して、町の生産物、第１次、第２次、第３次と商品化して活性化させるかという問題でこういう会議を開いているのであれば、町も当然積極的にかかわってですね、事務手続だったり、あと県とか国のそういう申請だとか、町が協力すべき、協力というのは積極的にやるべきだと私は思うんです。個人のレベルでは難しいんですよ。普通に我々日常的に俺だって商工業者として商売して日常的に目いっぱい仕事をしているわけです。そういうときにそれ以外に自分のこの新しい事業をやるときに、もちろん自分で当然手続とか申請しなくちゃいけないんだけど、それをもっと１次から６次まで農家の生産増、商品化まで持っていけるか

どうか、個人レベルではなかなか難しいので、それを町としてそういう部分でバックアップできるか、積極的にいろんな内容のことでね、バックアップすればやる気のある人は協力してもらえるんだということであれば。新しい取り組み、進めることもできるんじゃないかなと私は思っているのね。

- 委員長（我妻 薫君） そのバックアップはね、共通しているので、バックアップするのを、どう発掘するか。その、バックアップする……。それで町では、今補助支援やるんだよって言って投げかけて募集している。その私が言いたかったのは募集だけでいいのかな。さっき出たようにいろんな人、我々この前、去年ね、町内の人たちでも、うんと気になった。この人たちがお互いに意見交換する場というのがあったのかな。ないよね。ということは、農協も個別農家と大手とね、こうやっているだけで、その、本当は農協なんかが生産者の代表なんだから、そうすると加工とね、外の、そういうところに現場の人たちを購入させる企画なんかをつくってもらえばいいんだけど、何か農協でもそういう企画はないような。交流していてもちょっとないなという感じもしたし、さっき前原さんから鎌田醤油さんの話出たけれども、鎌田醤油さんなんかの生産者との意見交換の場なんかもつくっているのかな。鎌田醤油さんと直接は、この人とはいうところとはやっているのかもしれないけれども、例えば豆生産者の人たちとの率直にね、この地域内で私が目指すしょうゆとマッチしたものがつくれないとか、そういった意見交換をできるような場が果たしてつくられているのかな。なぜさっきのお酒だってそうだけれども、安部さんは自分でやっていたでしょう。自分で、そこで先ほどの6次化に向けてというのにその延長線にある。そういうような個別的にやっているやつを、こういうふうにさっき言ったコーディネートというか、千葉さんからよく言われるのは町が行政がね、直接営利にかかわるものに入ったら大変だと前からね言われると思うんで、支援するといってもやっぱり限界というのがね、金額的なもので金銭的な面であまり入り過ぎると行政が中心になってしまふ危険性がある。そこまではやっぱり難しいものがあるんで、ただ足利とかあとはここと言えば小さいところだけれども、そういう何というかな、つながりを持とうとしてやっている人たち、それをどうつなぐのかというのを足利でもすごくね、何か学んだような気がするし、ただあそこは笠原さんがやってくれたんだけれども、ここではそれをやろうとする部分は果たしてまだ出てくるのを待っているのか。そのところをどう行政的にプッシュしてやるのか、プッシュするためにはどういう行政的なかわりがあるのか。何かその辺うんと気に、こう何というか。

- 委員（鈴木宏通君） いいですか。同じことかもしれませんが、私、笠原産業において

ね、いいですか、名前を言って、議長が最後に質問したことです。麦を生産してて、例えば顔の見える最後の流通がね、消費者のいる中で、私たちはそれが無いと。私たちもそう思っています。大豆をつくるのも米をつくるのもそうなんです、やはりそういう1次産業の方々が、例えばそういう直売所なんかで売るのはまた顔の見えるという部分も出ますけれども、本当に量的に多いものの米やら大豆、麦などをつくってはいやはり最後の流通によって最後に渡る顔の見える消費者のところに行けるかというところがやっぱりこの間、うんとインパクトがあって私は「ああそういうことが必要なんだろうな」と思ってこの間議長の質問に感嘆していましたけれども、やはりそういうところのひとつやっぱりつなぐ部分というのは、そこにもあるんじゃないか。例えば商品だけじゃなくてね、米なり麦なりというところありますけれども、そういうところもまた一つかなと思ってきた研修でした。

- 委員長（我妻 薫君） 特に2次加工がね、そこをつないでくれているというのが。
- 委員（千葉一男君） やっぱり難しいんだなと思って聞いていました。私はね、6次産業という言葉の発生のよく歴史わからないけれども、多分地場産、ここでやるのは米が中心な土地ですから、米だとか農産物を途中で付加価値をつけて6次産業化してやろうと。そのときに、そういう作業というのは利益を追求する仕事なんですね。ですから、よく考えてみると今2次産業は服部さんもそうだし、笠原さんもそうなんですけれども、2次産業というのはやはりコストを意識した商品の要するに利益をどう確保するかということを中心にして市場の大きさ、サイズ、要望を見ながら商売に乗せていっているんですよね。じゃあ、ここで6次産業をやって何を生み出していくかというときには、本当を言うと私自身すごく難しいなと思っています。その中でできることは何かといたら、さっきプレイヤーは町民ですよ。町民が働いてもらって意思決定をして選んでもらうというところがどう誘導するかということですから、そのために情報だと思いますよ。それは、農業の歴史を考えたら、全部国の政策の中でね、第1次産業とは言っているけれども、僕は産業じゃないとよく主張したけれどもね、やっぱり国の政策をよく読みながら、ここで働いている第1次産業の人たちあるいは第2次産業の人たちがどう商売で利益を得て豊かになれるかというために選択をする情報、政策に合わせた情報、すばやくね、やっぱり提供していくことがここでできるまずスタートじゃないかなと私は思っています。ですから、ものをやるためには市場調査からみんなやらなくちゃいけないけれども、それは行政がやるんじゃないでプレイヤーが考えながら情報をもとにしてどう産業に結びつくか、産業にね、ということが大事だと思うので、僕は情報の提供を何ていうのかしら、組織的に早く正確に使えるようにして提供していくような機能を持ったらいんじゃないかなと、これは

もう理想みたいですけれどもね、そう思って今まで見学をしてきました。具体的には、さっきちょっと委員長も言ったように、行政というのは、共同社会なものですから、リスクを基本的にはとるような仕事は従来歴史的にですよ。今は農業も競争をさせられていますね。だけどそれはなぜかという、今まではコストを全く考えなくてもよかったけれども、値段が決められてきてね、もうからないようになったからこうなったわけですよ。農業の中心の中でも何といいますか、畜産を選んだり、果樹を選んだりというのは米よりももうかるからそういうところを選びながら市場に対抗していったという歴史が僕はあると思いますのでね、要するに情報をどういうふうに使え勝手をよく選択ができるような情報を提供できるかということが私は大事じゃないかなというふうに思っています。

あとは、ちょっと具体的な策についてはですね、難しくてちょっと言えないのですね。

- 委員長（我妻 薫君） 難しくてと言わないで、出してください。
- 委員（千葉一男君） みんなの税金を投入するならいいけど。
- 委員長（我妻 薫君） 千葉さんから言われたのは、情報ということで、農協との意見交換のときも、じゃあさっき言ったように、農家個々にはいろんな情報を一応ね、でも何かそれも果たして情報提供というのでもうかなと私首かしげて帰ってきた。私自身。
- 委員（千葉一男君） 私言っている情報というのはね、産業というのは利益活動なんですよ。だから、余計にもうかることを考えながら２次産業はやって、商品を開発し、生産の工程を改善しながらやってきたわけ。ですから常にそういうふうに変化をさせないと利益確保できなかった。ところが農業というのはそんなリスクなんていうこと、天候を考えながらね、いい品物とかときどきある時期からは品質と量をいろいろと制約、条件がついてきたものですから今のようになっているけれども、もともとの歴史は違うと私は思っている、全然。ですから、それを踏まえた上では政府にリンクさせた具体的に使い勝手のいい情報にして皆さんに、２次産業の方にも３次産業の方にも、１次産業の方にも提供していくということが大事じゃないかなと思っています。
- 委員長（我妻 薫君） 今言われたその情報のやつも私言いかけたのは、それぞれの情報の提供の仕方が農協を通じていっているとか、ある意味では部分的に国でやったとしても、壮瞥とか足利で農商工連携で共通しているのは、どちらも金融に関係した、あるんだよね。２次産業の壮瞥のみそやさんだってあれ、金融のほうからね。（「金融ですね」の声あり）声がかかっているのね。あと笠原さんとかね、ロアさんだってそうだけれども、どちらかというとそういういろんな……が金融、商工会とかというよりも、どちらも金融かんだよ。そうすると、

金融のほうは利潤だから、金融のほうはそれは一番。（「そう」の声あり）

- 委員（千葉一男君） コンサルタントなんだよ。金融とは言いながらね、両方でもうかる、俺ももうけたいんで、あなたもこうやらないかと来る、金融からね。同じなんですよ、商売。
- 委員（前原吉宏君） 要は平たく言っちゃうとあれなんですけれども、補助金じゃなくて融資なんですよ。
- 委員長（我妻 薫君） 融資なの。
- 委員（千葉一男君） そう。だから商売なんです。
- 委員長（我妻 薫君） そこが一つのキーになるかもわからないですね。町でやっているのは補助なんですよ。こういうことをやったら補助を出しますよという、これが行政からずっと来る。農協ルートというのもそれが多いですね。
- 委員（千葉一男君） だけど、そこはさ、コストの流れというの、補助金はね、有利に働く。コストというか、生産コントロールかかるからね、だからそれをうまくミックスさせるようなコーディネートさっき使っているけれども、それは俺もうけたいよと思う人がやっているわけですよ、足利も。ここでもさっきそのほら、みそやさん。（「鎌田さん」の声あり）鎌田さんね、鎌田さんだって結構やっていますよね。いろいろな、自分の商売を維持するためにどうしたらいいかというのをしているんですよ。
- 委員長（我妻 薫君） そういう意味では、今言った利潤を求めるために融資としては金融はそれぞれの業者には今でも働きをしているということね。（「そうです」の声あり）その後、じゃあその個別の利潤を求める考えでの融資の声かけと、その地域を全体を意識した、あるいはほかの産業との連携を意識した、そういった意味での呼びかけというのは、ここで行っている農商工連携ということである程度ね、連携して利益しかも融資の対象としていいですよというのをやっているのが壮瞥にしろ足利にしろ共通しているのかな。みんな個別的にはみんな産業やっている人たちは金融機関との接触はあるはずだから。それがどうそういうの、連携を含めた金融、融資の話が来ているかとの違いだと思うのね。
- 委員（前原吉宏君） 私的にはですね、さっき話出していた鎌田さんにしろあと南郷の酒屋さんにしろ、そういうところというのは規模はあれですけども、そういう6次産業的なものは完成されているのかな、ある意味。流通ができ上がっている。（「個別的にね」の声あり）はい。自分ところの商売の中ではね。だから、我々が形としてこれ6次産業として育てましようと言った場合、この地域というのはものがいっぱいとれる、いろんなものがとれるじゃないですか。だから、お米であったりジャガイモだったり小麦だったり大豆だったりバラだったり、いろい

るあるわけですね。だから、生産物としては私言うとおかしいですけども、何でもとれるわけですから、それはもう何をもってそういうのをつくっていくのか。実際にやっている中間業者があるわけですね、成立している。

- 委員（千葉一男君） 結局結果として6次産業になるのであって、6次産業ってパターンを決めてね、はめ込むものではないと私は思うんですけどもね。ただ、だから農業中心の地域ですから、私どもの育ったところは、だから農業を基幹産業として生かしていく、将来。この場合にこれをどううまく付加価値をつけていくかという6次産業という言葉が多分出てきただろうと思うんだけど、それは行政がそういう施政はやってもいいかもしれないけれども、お金を投入してね、そうすると行政がみんなやっているところありましたよ、昔いっぱい。ロシアだってそうだし、行政がお金を出してきたというところもあるんだ。ところが、我々は自分が競争する中に生きているんでね、やっぱり一定の評価、管理の範囲でしかできないものなんです。つぶれるほうは全部根に持つんですから。やるほうは。だから、私は情報をどうやって整理して皆さんに提供できるかがまず努力のできる仕事としてはこれはできるんじゃないかなと思っているわけ。ことしの来年の予算を組むという、国が言ったらね、その情報をとりながらこういう仕事こうあるから、ここは補助金とれると。そこはあなたが自分で負担しながら、融資を受けながらやらないかというようなね、アプローチはあるかもしれないと。

- 委員長（我妻 薫君） 今かなりキーワードとしては情報をどうね、幅広く提供できるのか。すばやくという、あとは連携ね、それぞれみんなやっているけれども、それをどう連携をコーディネートするのか。あとは、あと地域の特性としてはいろんな産物が結構種類が豊富だと。それを絞るというかね、特定化するということもキーポイントだけれども、そうするともう一回戻るのは、そこに、誰が絞るかにね。そうすると、そんな現状の中で、じゃあ今町でやってきているのはというのは産業振興課中心にやってきているのは今まで6次産業だから、農商工連携と言いつつもやってきていることはじゃあどういうことかと。すると、研究会だかの募集ね。（「そうですね」の声あり）だよね。あとは、商品開発して出てきたのは補助しますよ。（「シードルとか」の声あり）シードルとか。これもさっき言ったように、応募型というか、募集型じゃないのかな。町に対して、こうね、集まってください、出してください。出てきたらば助成しますよ。今、やっているのは主にそういうパターンの町のやり方だな。そうですね。そこでそういう、さっき言ったのに戻ると、連携をどうつくるのかというところのあり方については余り手を触れられていない。さっき言ったように、鎌田醤油さんなんかもやっているかもしれないけれども、鎌田醤油さんなんか、あれはほかの生産、2次加工の人たちにも、地元

とのかかわりというところに目を向けさせるような、何かね、そういう何かそのプッシュする
ような、そういったものがちょっと足りないのかな。

○委員（藤田洋一君） 今、委員長言った役割、その役割が後方支援として行政……、生産者と
やはりいろんなこのサービスできるわけですから、それと2次産業、3次産業の中での交流と、
我が町で6次産業計画作るわけですね、そういう部分でね、さっきから千葉さん言った情報、
そういう部分の役割をやっぱりお互い……行政の補助金だとか、だけでなくね、そういう情
報は交流の場を設ける、みんながやる気を起こさせるようなね、そういうふうなものを持って
いくのは行政のそういう後方支援としての役割かなと私は感じています。前の報告書にみんな
書かれているんですが、今言ったような部分ね、その辺がちょっと欠けているなと私は感じて
いたんですけれども、結局安部さんだってバラだってみんな個人個人で独自でやっているでし
ょう、それをやっぱりね、もっと町民の……、お互いに協力し合っているというふうにならな
いとまとまっていけないと思うんですよ。その辺のやっぱり役割の部分を経営として考えてい
くべきかなというふうに私は感じていましたので。（「難しいよな」の声あり）なかなかまとま
ってはいかないんですけども。

○委員（千葉一男君） 今言ったように、行政の役割というのは、ちょうど結婚相談、結婚式を
している人が少ないので、両方を結婚させるようにしようというチャンス、場を設ける、ここ
までしかできないんです。あなたとあなた結婚してくださいとかできないです。全く同じなん
です。産業だってね、連携をしなさい、あなたたちはなんていうことはできないんです。だか
ら、そういう場をね、つくってそれで意思決定をできるように、なるべくできるような、それ
はいくらで意思決定してくれるかわかりませんが、ああこれだったらやろうかというよ
うな意思決定をしてもらいたいような情報の提供とそういう場を設けることをね、行政の私は限界
だと思っています。

○委員長（我妻 薫君） 藤田さんもそこね、別にあなたとあなたやりなさいということと言っ
てないよね。

○委員（藤田洋一君） お互い知らない部分があるんだから。

○委員長（我妻 薫君） ただ、やっていることを、意見交換……。

○委員（千葉一男君） それはわかるけれども、ちょうどね、結婚してくださいって、結婚コン
サルタントと全く同じようなね、形態だよということを言いたいよね。

○委員長（我妻 薫君） 同じような意味だと思うんです。私も藤田さんが言っているのも同じ
内容だなというふうに。だから、何回も言うように千葉さんが言いたいのは、行政が余りここ

とこことというね、結びつけるというのをやるというんじゃないくて、私も思っているのは、みんなやっている、ただキーポイントとしては町の生産物を生かしながら町の活性化を図るためにはみんなでどう協力できるのかというところの意見。それを柱にして意見交換の場だと思うのね。（「そうです」の声あり）あなたとあなたやりなさいじゃなくて、それには生産者にはこうですよ、麦は今こういうのつくっているんです。我々はこういうほうに目を向けて生産しているんです。あるいは、豆つくっている人たちも、どういう意識でつくっているのか。そういうこともお互い、じゃあそれを加工する側の鎌田さんなんかはどういうふうにして豆を調達しているのか。そういったところで、すぐさっきの柱に沿った意見交換となれば、もっとこう意見交換がね、できる可能性も。ただ、あそこであなたとあなたでやりなさいって行政が言うんじゃないくて、そういう意見交換あるいはその中で一つのポイントになるところに向けた議論ができる場を、そこは情報の交流できる場でもあるし、その場をまずつくってやるのは行政しかここではないのかなと。例えば足利だったら笠原さんがやったかもしれないけれども、そういうキーになる人たちが、あるいは業者が出てくるのを待ってられないとすれば、その音頭をとってやるのは行政しかないのかなという思いはする。

○委員長（我妻 薫君） 前原委員。

○委員（前原吉宏君） 例えば、この間、灘の灘菊行きましたよね。灘菊行ってあそこの売店の中の品ぞろえ見てもやっぱりそれなりに関心して帰ってきたんですよ。酒だけじゃなくて、あれだけのバラエティーの。我々お土産自身もそれなりに買ってきて満足しているんですけども、そういう努力というのはやっぱり企業がしている。我々はそういうものをこうだったよということを言っているけれども、やりなさいとは当然言えないわけだから、あれを我々が例えば求めてね、どうなるのかって今私は疑問に思ったんですけども、ああいうのが理想のかな。例えば、甘酒を売っていたりとか、……とか、そういう２次産、副産物。そういうのも一つの産業になるんじゃないのかな。

○委員長（我妻 薫君） 今言われるような安部さんとかはそれをね、近いことをやっているけれどもね。ただそれが中の人考えた……。

○副委員長（山岸三男君） 何か、私ね、最初に言っていたのは、１つの企業、今言った灘菊さんのようなね、独自の造り酒屋さんがあれだけの規模の会社ですけどもね、そうするとそこから酒をつくることによってこうじが出てきたりなので、副産物できてそれを商品化して、さらに町のいろんなグッズまで、どんどん発展していました。これは、大企業となればなるほどみんなそういうふう to 拡大していく。一番簡単な話題にするのは、楽天だってさ、カードを確

保する、ね。いろんな今度は何だ、金融もやっていますよね。1つの元手のある会社がいろんな事業に展開する。ナショナルだって今や、ものすごいでしょう。単なる電気産業じゃなくて、住宅産業、ハウスメーカー、あるいは金融。いろいろあります。1つのもとの会社がどんどんどんどん広がっていくわけじゃないですか。それが、美里町ではそういう企業が今ないですよ。今我々が注目しているのは南郷の安部さんは、今美里町ではトップですよ。この間、私たちが行ったときには、年収今うちでは1億超えていますとあの奥さん言いましたよね。美里町の農家で1億の売り上げ、そういう売り上げというのは、あそこしかない。そこで、それぞれのいわゆる経済力、背中にあって独自に商品開発とかそういうのに枝葉をわかれて手を染めていくというかね、いい意味でのね。それを、じゃあ美里町が産業化するにはどうするかということでの連携というのを話しているんだけど。町と我々議会の中で一生懸命農商工連携をどうしたらいいかというときに、さっきから話出ているようにさ、笠原産業さんという1つの会社が社長さんの発想で、千葉さんは会社というのは利潤追求なので、利益、もうかるかもうからないで始まるんだと。まず、前提、もうかるかもうからないかあって、それをどうしたらもうかるになるかって考えたときに、昔話にさ、風が吹くとおけ屋がもうかるという話あるんですよ。あれ最初わからなかったけれども、いろいろ聞いたら、風が吹くとほこりが立つんだ。ほこりがあってどうのこうのって、余り正確には覚えていないけれども、最終的にはおけを買って目を洗わないとだめなんだという、そういう流れがあって、風が吹くとおけ屋がもうかる。商売もそういうことだと思うんです。笠原産業さんは製粉会社ですよ。製粉会社、粉どこから仕入れるかっていったら、麦をする生産者がいて初めて、粉だけ生産して、卸問屋に流して、それだけでいいのかって考えたときに、そこから発生するお菓子屋さんとかそば屋さんとかって、粉を使う末端の業者さんまず取り込んで、それが結果的に6次化になる。農商工連携に結びついていくわけですよ。俺が一番笠原産業さん、関心したのは社長さんやっぱり考え方なんというかな理念というかポリシーがあるなと思ったのは、そういう人がいると世の中というか、会社とかそういうのがどんどん膨らんでいくし、地域活性化にもつながっていく。1人の人の考え方で、こんなにもね、何年間かかったとしても、物すごいこの人の力、すごいなと思いましたよね。それは美里町ではどういうふうに当てはめるかという、どういうふうになるかな、難しいなと、結果的に難しいなと思ってしまっただけでもね。いわゆる俺が思っているのはね、何かやるときはね、最初から大規模大規模と考えなくていいと思うんです。まず小っちゃいところからできるところから始めて、あるものから始めて、少しずつ少しずつこう拡大していく。そのやり方で地道にやっていくというのが一番いいのかな

と俺は個人的には思うけれどもね。そういう、さっきさ、前原君が一番最初に言ったね、本町が生産しているものまず最初取り上げる、美里町にはまず小麦粉、麦も、豆も、生産としてやっていますよね。豆なんかは県内でも結構生産量ふえている。だったらその豆を、ただ豆として出荷するだけじゃなくて、美里産の豆として加工してみそ、しょうゆ、あるいはずんだ餅のずんだとかね、いろんな商品開発できると思うんです。それを美里町産っていう、銘柄とかね、商品の名前をつけてね、発信する。そういう小さいところから持っていっていいんじゃないかなと私は思う。

- 委員長（我妻 薫君） そういうふうに持っていくためにも生産者の意識変えなくちゃない。そこにどう持っていくかが一番の。最初から笠原さんみたいな人を求めるということになってしまうわね。
- 副委員長（山岸三男君） それは無理だから。
- 委員長（我妻 薫君） それは無理だから、その場でどうね、意識づくりの、持っていくための行政的なかわり。
- 副委員長（山岸三男君） 私ね、さっき言おうとしたんだけど、今委員長言ったように、行政はどういうふうにする、まず、美里町の農業生産としてのビジョンを掲げないとだめだと思うんです。美里町はこれだけの農地持っている、基幹産業は米ですよ、稲作ですよとうたっているんであれば、美里町をこの基幹産業を中心にいろんな商品開発プロジェクトチームだとかね、町の政策としてそういうの掲げようとしてまず旗を上げるってこと。その旗を上げて、そこから農家に対して、美里町はこういう、生産者に対してももちろん6次産業進めていますよ、あるいはこういう商品開発したいと思っていますという、町のビジョンを掲げて、生産者に対してこういう意気込み、町としてはこういうふうに思いますから、それに対してこういう補助事業もありますよ、こういう情報提供だったりいろんなことで町としてはバックアップしますよって、そういうふうの一つの旗を上げないと個別に言ってね、これをしてほしい、あれをしろと言ってもこれは無理ですよ、さっきから議論しているとおり。町がある程度そういう掲げないと、旗を掲げないと、なかなかそれは意識改革してもらおうと、町はこういう主張をしていますよということで。委員長ね、……というのはそういう町がビジョンを掲げる。
- 委員長（我妻 薫君） 副委員長がその考えているビジョンを出してください。
- 副委員長（山岸三男君） 俺ここですぐ出せって……。概念というかね。
- 委員長（我妻 薫君） それを出せないから。
- 副委員長（山岸三男君） 理念として、そういう方向性をまずやるべきじゃないかというこれ

提案なんですね。それからあと具体的なほうは、みんなで協議する。

- 委員長（我妻 薫君） 私はこういうビジョンというのを出してもらえば提案になるんです。
- 副委員長（山岸三男君） 今すぐここで出せと言われてもちょっと出ないけれども。でも、考えることは可能です。特に難しいことでないから。
- 委員長（我妻 薫君） 難しくなかったら出してください。
- 副委員長（山岸三男君） 今すぐは出せないって言ってるでしょ。
- 委員長（我妻 薫君） 休憩します。
- 副委員長（山岸三男君） 休憩。
- 委員長（我妻 薫君） はい、休憩します。

午前 10 時 42 分 休憩

午前 11 時 02 分 再開

- 委員長（我妻 薫君） 再開いたします。

今、休憩中に町の取り組み、6次産業化と農商工連携の説明を受けたのが、町として現在やっている取り組みのベースだなんていう確認しましたけれども、それを踏まえて我々がどうね、提案提言していくかということになるのかなと思うんですが。さっきいろんな足利の例、あるいは壮瞥の例なんかからいろんな意見出されています。壮瞥と言えば直接町がね、プレイヤーになるんじゃないくてあくまでも行政は支援の、ということで。それは千葉さんから言っていたのも、経済活動もね、全面的に行政がやるんじゃないということにも。そのランナーをどうつけていくかということ。そのなかなか壮瞥とか足利みたいにそれをリードするコーディネートする民間の人たちがじゃあ今いるのかというか、そういう人がいればね、すぐ支援できるけれどもね、どういう支援するかというふうなぐあいには、残念ながら見渡しても今のところね、見えないという状況です。そういう中で、我々は町にどういうふうに見つけるためというか、見つける支援を頼んでいくか。

先ほど出た、生産物いっぱいあるという現状。それにしても副委員長からはちゃんと明確なビジョンをと言われるけれども、その生産物を特定することにつながっていきかねないということにもなるかなと思いますが、ここでこの産物をというね、そうはちょっとならないような気もするんで、そこまでも……内容にはちょっと難しいのかなという思いもありますけど。共通して言われているのはもっと生産者同士、あるいはそれを2次加工やっている人たちの意見、あるいは流通やっている人たちの意見、まだ町がこう集めているだけで、相互の連携までいか

なくても、情報交換あるいは意見交換、そういった場もちょっと弱いということを確認できるのかなという。それぐらいは共通認識ありますね。

正直言うと、我々もこのみんなで取り組みやってきたから梨部会の人たちの意見も気持ちもある程度、ある程度ですけれどもね、つかめたかなって。本当にびっくりしたのは、産業振興課の職員もそんなに聞いていなかったように私は受けとめましたけれども。どうでした。何か初めてね、梨部会長とかは協議しているんだよね。あるいは農協とはね、やっけても。

○委員（鈴木宏通君） 販売が目的ではないので、農協との、梨部会に関しては。主には資材の調達为主ではないかなと思っておりますので、販売に関しても梨部会はそこまで協調性というか、もちろんそれぞれ各自に売っているという、集団の集まり。それだけですから。

○委員（前原吉宏君） 部会はね。

○副委員長（山岸三男君） ほとんど個人販売だよね。

○委員（鈴木宏通君） そう。だから、農薬とか資材の調達場所だったりするところかなと。

○委員長（我妻 薫君） いずれにでも町としてはその梨を大分中心的な位置づけに置いて、町のイメージにね、つなげて、そしてピューレなんかを使った2次加工、3次加工商品開発にかなり力点があると。

○委員（千葉一男君） こだわるようですけれども、私はプレイヤーは町民なんだから、そうすると掘り起こし、育成というステップがあるとしたらね、まず認識をしてもらわなきゃ困るわけですから、皆さん町民。そういう掘り起こしするために、掘り起こしということにじゃあどうかかわるか、掘り起こしの要素としては情報ですとかでしょう。その情報は具体的には国の政策であり、町の政策であり、そういうものを、ミックスして「やんねえか、こういうのがありますよ」という……。そこからいづらか生まれてきたら育成のかかわりをもつというふうなね、ステップじゃないかなと私は思ってきました。

○委員長（我妻 薫君） 情報の提供の仕方というか、のかかわり。ピンポイントで情報提供していくのか。町民全部にばっと同じ情報を提供していくのか。

○委員（千葉一男君） 全般にわたってさ、上がらない。効率悪いから。1次産業のキーポイントとなる人、2次産業、3次産業、それぞれの人たちのところには、やっぱり「おたくもそうだったの、おらほうこうだったの」とわかれば、じゃあここやろうという情報がね、これの認識進むのは町民が認識して意思決定していかなくちゃ。そういうチャンスをね、まず構築できたらな。安定した。

○委員長（我妻 薫君） 今、千葉さんが言ったのちょっとヒントあるの。おたくもこうだった

の、うちもこう。そこの横の。（「そう」の声あり）横の隣にいる同士の理解もないよね。

- 委員（前原吉宏君） そうだよねってことですな。
- 委員長（我妻 薫君） 同じ情報だけれども、一方的なものなのか、同じ情報を受けて横との情報交換、意見交換。
- 委員（千葉一男君） 結局はね、もうけようとすればね、おたくはってやりますよ、ちゃんと経営者は。言われたことをやりましょうという情報の受けとめ方でなく、あれじゃなくてね、俺も生きていくためにはもうけなくちゃいかん、おたくどうしているの、必ずそういうふうな思考になりますよね。だからそういう人を1人でも多くするのに情報、それは行政から出すのは国の情報であり、町の情報であり、県の情報をできるだけ補助金を中心にしたね、やっぱりサポートどうあるか。それに自分のお金を投入、付加させていく。では俺やってみっかというような、そういう掘り起こしをね、やることも大事じゃないかなと、今できる部分。
- 委員長（我妻 薫君） 今千葉さん言った情報というのは、主に国の補助事業の情報がメインだと言われているの。
- 委員（千葉一男君） いや、私言っているのは、行政がかかわるところはそうだ。だけれども、横の連携はそういうセットをするのも行政がやればいいんですよ。一緒にね、こっちとかあっちじゃなくて、そういう情報を全体をね、やっぱり生かすように、みんなを人材を生かしているものが、必要なんじゃないか。
- 委員（鈴木宏通君） ちょっといいですか。休憩してもらっていいですか。
- 委員長（我妻 薫君） 今再開したじゃん。
- 委員（鈴木宏通君） 休憩っていうか、ちょっと私的なことを言いたいので。
- 委員長（我妻 薫君） じゃあ、休憩します。
- 委員（鈴木宏通君） 済みません。

午前11時11分 休憩

午前11時20分 再開

- 委員長（我妻 薫君） じゃあ、再開します。

今、休憩中にかなり共通認識を深めたかと思いますが。どうしますかね。まあそんなに大きい違いはね、出ないと思うんですが、今まで出されたような意見を1回整理して、さっきも言ったように、町が進めているやつをまず……、それに対して、我々としては、主に出てきているのが情報を共有する場あるいは連携し協議する場ね、横のつながりの、横の情報交換する場

がないということ。そういったところが主にベースになるのかなというふうに思いますので、それらを1回整理、副委員長と相談しますけれども、整理させていただいて、次回少しそれをまとめたので見直して、1回でまとまらないならもう一回ってなりますけれども、この次まで、ちょっときょう出たような意見を整理させていただいて、次回それを深めるというふうにしてよろしいですかね。ほぼね、北海道から含めていろんな意見出していただいたのかと思いますので。櫻井さん、ずっと聞く立ち場だったから。

- 委員（櫻井功紀君） 我々の委員会のね、研究テーマ、農商工連携によるね、産業活性化、ひいては町の活性化というようなことで、町がね、どのようにかわれるのかというか。やっぱりこれは大変な問題だと思いますよ。大きな問題だね。やっぱりつながりだと思うんだ、一番は。生産者ね、それから加工業者、それから販路、それから消費者、そして個人でね、自主努力して汗かいてね、一生懸命やっているんだよね、生産から加工まで。企業もそうなんです。生産団体はそうなんです。やっぱり、千葉委員が言ったとおりね、利益が上がらないものは誰もやらないんですよ。最終的には利益なんですね、個人であっても。だからやっぱりね、北海道あるいは笠原産業を見てもね、何というか、強いリーダーシップを持っている個人とか、強いリーダーシップの会社がそのまとめ役というかな、それを育てていくのが行政だと思うんだな。強いリーダーシップの方、あるいは笠原産業の社長とね、……でもつながり持っているでしょう。生産から消費者までのつながりね。そして、うちの場合は、ちょっと今まで調査してみてもね、農業、それから商業、工業、これの連携はないもんね。みんな個人で生きていくのに精いっぱい、自分のやれるやつだけやっているんです。そこを行政がどのようにしてね、核となる人材といったらおかしいか、核となる、鎌田さんなら鎌田さんのようなね、笠原産業さんの社長さんのような……であれば私は回ってくると思うよ。その回ってくるというのは、産業の活性化、それから町の活性化、ひいてはそのこじ開ける企業のね、利益につながっていくんじゃないかなと思いますよ。だから町は、核となる人をどのようにしてったらおかしいかな、やっぱりやるんだという人が、笠原産業の社長さんとかね、あと安部さんだっけな、北海道の人のようなね、あのような目標をね、やっぱりそういう農業、商業、工業者と目標はこれなんだよ、つながりを持っていきませんかというね、強いリーダーシップのある方がないと、農商工の連携はできない。

- 委員長（我妻 薫君） 今、まとめのものを。だから、そういう人をあなたがやってくれて、これまたね、頼むのもできないしね。そこをどう。

- 委員（櫻井功紀君） 行政主導で農商工でこれだと目標掲げてやったらだめなの。後方支援な

の、千葉さんが言ったとおりね。

○委員長（我妻 薫君） そういう人が生まれてくる状況、どうしたらいいのか。それには産学官連携のやつもあるけれども、うちのりのせっかく宮城大学との、ね。そういう人たちのやっぱり、そういう人たちとの連携とった協議の場、そういうのをもっと模索していった。

○委員（櫻井功紀君） だから、例えばね、壮瞥町ですか、農商工連携事業でなり手はプレーヤー、やる気のある生産者事業者であるんです。農商工連携推進委員会をつくるんだよね。これを町でつくるとするのはできると思うよ。あくまでも推進委員会は後方支援に徹すると。

○委員長（我妻 薫君） そういう、連携するのを協議する場、そういうね。そういうのを、そういう組織づくりというのがまずその中から横の意見交流も含めて、あとそこに宮城大学だのそういう人たちの意見も入ったね、そういう場をつくるというのがまずは大きな、今、櫻井さん言ったように、誰々さん頼むじゃなくね、そこまで、そういう人が、笠原さんみたいな人が出てくればあれだけど、それは、そういうまず、情報提供、情報交換、意見交換、そしてそういうのを推進できるような場をね、つくるとというのがまず一応の大きな流れの柱になろうかと思うんで、その辺ベースにまとめて。

○委員（櫻井功紀君） 町側へ農商工連携推進委員会つくったらはという提言でいいんじゃないですかね。

○委員長（我妻 薫君） そういうのね。

結論出たような感じもしないではないんだけど、その辺をベースに次回まで、ちょっとまとめさせてもらって……。

○委員（千葉一男君） 共通していることは難しいなということを全員が、ね。

○委員長（我妻 薫君） 難しい、難しい。じゃあ、その辺、無い頭でまだ少しまとめ、しますけれども。その辺まとめて、次回9月会議の終了後にね、やりたいと思います。この前内々で主な人たちというか、主な人、大体の人たちに聞いているけれども、9月議会終了が大体25だね。（「25」の声あり）月曜日だから、副委員長とは少し俺は間を置いてだと思ったけれども、副委員長はすぐやれという。おっつけて26でなくてよろしいですか。

○委員（千葉一男君） 26日、なんかあるな。監査。

○委員長（我妻 薫君） 監査。

○委員（千葉一男君） 26日夜ならいいです。

○委員（藤田洋一君） 夜はちょっと。

○委員（櫻井功紀君） 28日熊本来るって言ったよね。

- 議長（吉田眞悦君） ああそうです、午後から。
- 委員（櫻井功紀君） 午後からね。
- 議長（吉田眞悦君） 2時半。
- 委員（鈴木宏通君） 委員長と副委員長は関係あるんだな。
- 副委員長（山岸三男君） 27は。27日は大丈夫だな。
- 委員（千葉一男君） 27、28、30はだめ。
- 委員（前原吉宏君） 26から。
- 委員（千葉一男君） いなくたっていいから。
- 委員（鈴木宏通君） ここずっと。
- 委員（千葉一男君） ただ、午前中、28、午前中はいいいよ。午前中にやっていただければ。
- 委員（櫻井功紀君） 28の午前中ならいいっちゃね。
- 委員長（我妻 薫君） 28の午前中がいの。
- 委員（前原吉宏君） じゃあ、28で。
- 委員長（我妻 薫君） じゃあ、28。
- 委員（櫻井功紀君） 午後から正副委員長……。
- 委員長（我妻 薫君） いつもおらほうの日程調整は監査委員……。
- 委員（櫻井功紀君） 28。
- 副委員長（山岸三男君） 午前中。
- 委員（千葉一男君） 28日の午前中にやります。
- 委員（鈴木宏通君） 28、9時半ですか。
- 委員長（我妻 薫君） 9時半。
- 副委員長（山岸三男君） 9時半はいいけど、私1時から古川でクリニックの研修受けなければならいんだけど。
- 委員長（我妻 薫君） 午前中に終わりますか。（「熊本……」の声あり）
- 議長（吉田眞悦君） 午後。
- 委員長（我妻 薫君） 午後は委員長だけ。
- 議長（吉田眞悦君） 2時半。
- 委員長（我妻 薫君） 3委員長さ。
- 議長（吉田眞悦君） 熊本の。熊本は全員来る。
- 委員長（我妻 薫君） 違う違う。

○議長（吉田眞悦君） 結局30分程度って言われているから、研修会とか交流会とかっていうことじゃないんで。

○委員長（我妻 薫君） じゃあ、28の木曜日、9時半。（「はい」の声あり）

ということで、次回、ある程度まとめられればいいなと思います。頑張ります。

○委員（鈴木宏通君） お願いします。

○議長（吉田眞悦君） 今、休憩中でしょう。

○委員長（我妻 薫君） いやいや、今確認したんで。

じゃあ、次回は、9月の28日9時半からということにしたいと思います。

休憩前に、終わる前に。終わってからでいい。

○議長（吉田眞悦君） あの、ちょっと。

○委員長（我妻 薫君） 休憩します。

午前11時30分 休憩

午前11時41分 再開

○委員長（我妻 薫君） 再開します。副委員長。

○副委員長（山岸三男君） 大変、活発に皆さん協議をしていただきました。いろいろ、最終的に櫻井さんの意見が何か一人勝ちしたような意見を言っていたきまして、ごもっともだと思いました。いろんな、提案等内容こうやって出ましたけれども、最後に櫻井さんは農商工連携推進委員会、こういう組織をつくったということ、お話しありましたけれども、それ、名称違ってね、事実上美里町には産業活性化戦略室という室があって、それで産業振興課のほうでいろんな情報という形での事業の補助という国の補助金……商品開発とかを事実やっていることでございます。それを有効活用する、それを情報として生産者の方々にね、当然情報提供しているかと思うんですけども、それをもう少し濃密にわかりやすく提供することに力を入れるところもあろうかと思います。私たち、あと数カ月で任期が終了しますので、その前にです、しっかりとこの農商工連携の報告書を詰めたい、そんなふうに思います。もう少し結論というか、報告書ね、詰めますから、皆さん、今までのご協力本当にありがとうございました。と同時に、私たちもしっかりね、町の産業に目を向けて町の活性化につながるよう進めていきたい。そんなふうに思います。

大変きょうは御苦労さまでした。ありがとうございました。

午前11時43分 閉会

平成 2 9 年 9 月 1 日

総務、産業、建設常任委員会

委 員 長